

幼児の遊びに関する発達心理学的研究

—幼児のひとり遊びに関する研究 I—

進野 智子・小川 理恵*・加藤 千恵*・川端 紀子*・
松尾登喜子*・松島 綾*・松永 康代*

A Study of Play in Preschool children's Play.

—A Study of Solitary play in Preschool Children—

Tomoko Shinno, Rie Ogawa, Chie Katoh, Noriko Kawabata,
Tokiko Matsuo, Aya Matsushima, Yasuyo Matsunaga.

要 約

幼児のひとり遊びの発達的变化を明らかにするため、3歳児16名・4歳児33名の2つの年齢群のひとり遊びが同時期に1年間にわたって縦断的に観察され、8ミリビデオにより記録された。3歳児は6月および8月を除いて、4歳児は夏期休暇中の8月を除いて毎月観察された。幼児のひとり遊びは、遊び場所・遊びに使用された素材、道具、遊具・遊び中の行動・言語化に関するカテゴリーについてチェックリスト法により分析された。また、データはひとり遊びの継続時間・発生率についても分析された。

その結果、以下のことが明らかにされた。

1. 3歳児も4歳児もひとり遊びをする。ひとり遊びの発生数は、3歳児から4歳児になるにつれ減少する。4歳児では1年間を通じて1度もひとり遊びしなかった幼児がいる。
2. ひとり遊びは、3歳児に関しては保育室で頻繁に観察された。
3. 同一の素材を使用しても、3歳児と4歳児とでは遊び方の質的な差異のあることが、粘土の素材の場合に明らかにされた。
4. ひとり遊びの際の遊具の選択に性差のあることが観察された。
5. 4歳児は注視をしながらぶらぶら行動をするが、3歳児のぶらぶら行動には注視がなされない。

本研究を進めるに当たり、通年にわたる観察にご協力下さいました長崎大学教育学部附属幼稚園の3歳児および4歳児もも組の園児、また、この観察をご快諾下さいました長崎大学教育学部附属幼稚園の先生方に深く感謝いたします。

本研究を行うに当たり、長崎大学教育学部幼稚園課程幼児心理ゼミナール生福富香織さん・吉井弥生さんのご協力に感謝します。

*長崎大学教育学部幼稚園課程幼児心理ゼミナール平成4年度卒業。

目 的

Parten (1932) は、幼児の遊び行動を六つに分類し、何の遊びにも従事しない・ひとり遊び・傍観遊び・平行遊び・連合遊び・協同遊びへ発達するとした。この中「ひとり遊び」は、2, 3歳児に多く見られるがそれ以降は漸減することを明らかにした (Parten, 1943)。この Parten の遊び行動の一次元性に関する主張は、Barnes (1971), Smith and Connolly (1972) によって支持されてきた。しかし、Moore, Everstone and Brophy (1974) や Rubin, Maioni and Hornung (1976) はこの一次元性に疑問を抱き、ひとり遊びは年少の未熟な遊び形態ではなく、遊びの内容によっては年長児でも多くみられる目標指向型の遊びであることを指摘している。さらに、Bakeman and Brownlee (1980) は、Parten の年齢構成の偏りと統計処理の不適切さを指摘した。Smith (1978) は2歳児・3歳児・4歳児を対象に縦断的研究を行った結果、2歳から3歳前半には「ひとり遊び→平行遊び→集団遊び」の Parten の一次元性が当てはまらないことを明らかにしている。

また、ひとり遊びに関する研究法について Rooper and Hinde (1978) は、横断的研究法の不備を指摘している。

本研究は、幼児のひとり遊びが Parten 等の指摘するような一次的なものであるかを検討するために、3歳児と4歳児の自然発生的なひとり遊びをその開始から消滅までを縦断的に観察し、ひとり遊びの発生数・継続時間およびカテゴリ分析の観点から検討することを目的とする。

方 法

観察対象児：幼児のひとり遊びを観察するため、幼稚園の3歳児と4歳児の教室を1年間にわたって定期的に訪問し、ひとり遊びが始まって終わるまでを8ミリビデオカメラに記録した。撮影は約80分間継続され、この間に発生したひとり遊びが記録された。観察対象児は、3歳児18名 (全児平均月齢40.6ヶ月, $SD=3.00$) : 男児9名 (平均月齢39.6ヶ月, $SD=2.45$, 月齢範囲36-43ヶ月), 女児9名 (平均月齢41.6ヶ月, $SD=3.17$, 月齢範囲37-48ヶ月), 4歳児33名 (全児平均月齢54ヶ月, $SD=3.43$) : 男児17名 (平均月齢53.4ヶ月, $SD=3.03$, 月齢範囲49ヶ月-59ヶ月), 女児16名 (平均月齢54.6ヶ月, $SD=3.71$, 月齢範囲48ヶ月-60ヶ月)。

観察期間：3歳児に関しては平成3年4月18日から平成4年3月19日、4歳児に関しては平成3年4月18日から平成4年3月19日までの1年間。観察場所は、長崎大学教育学部附属幼稚園。観察は、対象児の教室・遊戯室・玄関ホール・砂場・庭・運動場・固定遊具を置いている場所等対象児がひとりで遊んでいる場所で行われた。観察方法は、週の決まった曜日の保育時間中の午前9時から午前10時20分までの80分間にわたって観察を行い、この時間中に発生したひとり遊びをその始まりから終了まで8ミリビデオカメラに記録した。同時に自然観察法による逸話記録も取られた。観察者は一クラスにつき二人であった。同時に数カ所でひとり遊びが行われているときには、保育室で行われているひとり遊びが優先的に観察された。観察回数は、3歳児に関しては教育実習期間中の6月を除き、11月には4回、5月12月には3回、4月7月9月1月2月には、各2回、7月3月には各1回観

察が行われた。この中11月2月はひとり遊びの発生回数は1回ずつ観察回数よりも少なかった。4歳児に関しては、5月11月12月には各3回、4月7月9月1月2月には各2回、6月10月3月は各1回の観察が行われた。この中、ひとり遊びの発生率は9月1月2月3月には観察回数よりも1回少なかった。

分析：8ミリビデオテープに撮影された子どもの遊びを、ひとり遊びのそれぞれの継続時間を明らかにするために、ひとり遊び毎にタイムを入れていった。次いで、子どもの遊び行動を10秒単位で、1) 場所、2) 素材・道具・遊具、3) 行動、4) 言語の4つの大カテゴリーの下にカテゴリーをもうけ、チェックリスト法により分析した。カテゴリー分析に際しては、筆者との観察の一致率が0.94になるまで観察者の訓練が行われた。各カテゴリーの統計処理に際しては、角変換値が使用された。

上記の4つの大分析カテゴリーは、以下のようなカテゴリーに分類された；1) 場所：観察した場所を①保育室②庭③運動場④砂場⑤スロープ⑥遊戯室⑦固定遊具⑧その他。2) 素材・道具・遊具：①砂、土②水③粘土④積み木⑤紙⑥ペン⑦鋏・糊・テープ⑧ひも⑨絵本⑩楽器⑪ままごとセット⑫人形⑬乗り物⑭固定遊具⑮大型遊具⑯フープ・おととと⑰短縄・ボール⑱植物・動物⑲その他。3) 行動：幼児のひとり遊び行動を①構成遊び②描画③読書・認知④楽器遊び⑤ごっこ遊び⑥固定遊具で遊ぶ⑦運動遊び⑧手遊び⑨移動⑩傍観⑪ぶらぶら行動⑫何もしない⑬凝視⑭注視⑮追視⑯その他のカテゴリー。4) 言語：幼児が話しかけられる場合（受動）、幼児自身が言語を発する場合（能動）に分け、その対象を①道具②教師③他児④観察者の四つに分けた。

結 果

1) ひとり遊びの発生数と継続時間

1) - 1. 観察日1日当たりのひとり遊びの発生数について

表1は、3歳児と4歳児の観察日1日当たりのひとり遊びの発生数を、各月毎および各学期毎に示したものである。3歳児の6月は、教育実習期間中で、実習生が6名クラスに入るため観察は行われなかった。

表2は、各学期毎のひとり遊びの頻度を示す。

両年齢群について各学期毎にt検定をした結果、3歳児1学期が4歳児1学期より10%水準でひとり遊びが多くみられる傾向があった（t=2.04, df=13,

表1. 観察日1日当たりのひとり遊びの発生数について

月	3 歳 児		4 歳 児	
	発生数 観察日数	発生数 日	発生数 観察日数	発生数 日
4	$\frac{23}{2}$	11.50	$\frac{15}{2}$	7.50
5	$\frac{23}{3}$	7.67	$\frac{14}{3}$	4.67
6			$\frac{2}{1}$	2.00
7	$\frac{9}{2}$	4.50	$\frac{8}{2}$	4.00
9	$\frac{6}{2}$	3.00	$\frac{6}{2}$	3.00
10	$\frac{1}{1}$	1.00	$\frac{1}{1}$	1.00
11	$\frac{3}{4}$	0.75	$\frac{3}{3}$	1.00
12	$\frac{8}{3}$	2.67	$\frac{11}{3}$	3.67
1	$\frac{2}{2}$	1.00	$\frac{3}{2}$	1.50
2	$\frac{4}{2}$	2.00	$\frac{7}{2}$	3.50
3	$\frac{3}{1}$	3.00	$\frac{0}{1}$	0.00

$p < 0.10$)。3歳児1学期が4歳児2学期より ($t = 3.92, df = 14, p < 0.01$)、3歳児1学期が4歳児3学期より ($t = 3.35, df = 10, p < 0.01$)、3歳児1学期が3歳児2学期より ($t = 3.49, df = 15, p < 0.01$)、3歳児1学期が3歳児3学期より ($t = 4.33, df = 15, p < 0.01$)、4歳児1学期が4歳児2学期より ($t = 2.46, df = 15, p < 0.05$) 有意に多くひとり遊びの発生がみられた。また、4歳児1学期が4歳児3学期よりひとり遊びが多く見られる傾向にあった ($t = 1.97, df = 11, p < 0.10$)。

表2. 両年齢群の各学期におけるひとり遊びの発生数

学期	3 歳 児		4 歳 児	
	発 生 数 観 察 日 数	1日当 たりの数	発 生 数 観 察 日 数	1日当 たりの数
1	$\frac{55}{7}$	7.86	$\frac{39}{8}$	9.88
2	$\frac{28}{10}$	2.80	$\frac{21}{9}$	2.33
3	$\frac{9}{5}$	1.80	$\frac{10}{5}$	2.00
通 年	$\frac{92}{22}$	4.18	$\frac{70}{22}$	3.18

1) - 2. ひとり遊びの継続時間

表3・図1は、両年齢群におけるひとり遊びの継続時間を学期別に示したものである。継続時間について、年齢・性・学期に関するF検定をした結果、有意差はみられなかった。ひとり遊びの継続時間に関しては、年齢・性・学期毎の変化は無いということになる。

表3. ひとり遊びの継続時間

() 内は総継続時間 (単位: 秒)

		一学期	二学期	三学期	
3 歳 児	男 児	\bar{X}_w	223.33	262.50	154.00
		s	233.21	180.61	99.12
		n	36 (8040)	16 (4200)	5 (770)
	女 児	\bar{X}_w	109.47	153.33	172.50
		s	100.39	109.42	34.19
		n	19 (2080)	12 (1840)	4 (690)
4 歳 児	男 児	\bar{X}_w	208.00	418.46	40.00
		s	195.04	713.97	17.89
		n	25 (5200)	13 (5440)	5 (200)
	女 児	\bar{X}_w	442.14	265.00	142.00
		s	297.95	259.28	101.86
		n	14 (6190)	8 (2120)	5 (710)

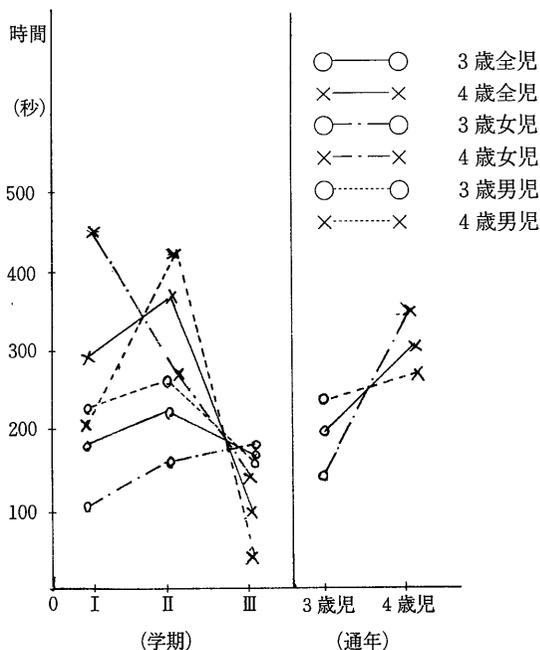


図1. ひとり遊びの継続時間

1) - 3. ひとり遊びをした幼児の頻度

表4は、ひとり遊びをした3歳児年齢集団の個人毎の通年における頻度をパーセンテージで示す。男児とあるのは、男児の中でその子どものしたひとり遊びの頻度を、全児とあるのは、3歳児年齢集団の中における頻度をパーセンテージで示したものである。年間を通してみた場合、J子を除いて残りの子は頻度に差はあるがひとり遊びをしている。

表5は、ひとり遊びをした4歳児年齢集団の個人毎の通年における頻度をパーセンテージで示す。男児・女児・全児に関しては、表3と同様である。男児17名の中15名が、女児16名の中10名がひとり遊びをしている。3歳児に比較して、ひとり遊びに関して個人的傾向が現れていることが明らかである。

表4. ひとり遊びをした3歳児

平成3年度通年
 <パーセンテージ表>

	氏名	男児	全児	氏名	女児	全児
1	A男	15.79	9.78	C子	11.43	4.35
2	B男	21.05	13.04	D子	5.71	2.17
3	F男	5.26	3.26	E子	11.43	4.35
4	G男	15.79	9.78	F子	8.57	3.26
5	O男	3.51	2.17	J子	0.00	0.00
6	P男	12.28	7.61	L子	5.71	2.17
7	Q男	3.51	2.17	Q子	14.29	5.43
8	V男	15.79	9.78	R子	25.71	9.78
9	X男	7.02	4.35	V子	17.14	6.52

表5. ひとり遊びをした4歳児

平成3年度通年
 <パーセンテージ表>

	氏名	男児	全児	氏名	女児	全児
1	S男	9.30	5.71	A子	0.00	0.00
2	K男	4.65	2.86	O子	11.11	4.20
3	M男	4.65	2.86	I子	0.00	0.00
4	L男	0.00	0.00	N子	11.11	4.29
5	U男	2.33	1.43	M子	3.70	1.43
6	Y男	13.95	8.57	Z子	7.41	2.86
7	E男	0.00	0.00	YH子	3.70	1.43
8	H男	0.00	0.00	YM子	3.70	1.43
9	T男	4.65	2.86	T子	3.70	1.43
10	J男	6.98	4.29	G子	7.41	2.86
11	W男	11.63	7.14	H子	0.00	0.00
12	C男	2.33	1.43	K子	33.33	12.86
13	N男	18.60	11.43	U子	0.00	0.00
14	I男	4.65	2.86	P子	14.81	57.14
15	R男	2.33	1.43	B子	0.00	0.00
16	Z男	0.00	0.00	S子	0.00	0.00
17	D男	13.95	8.56			

2) 各カテゴリーの分析

各カテゴリーの分析に際しては、分析シートの10秒を1単位として計数し、各カテゴリー毎に総発生数に対する頻度が算出され、角変換値に変換された。

2) - 1. 場所のカテゴリー

ひとり遊びの場所に関する検討は、①保育室②庭③運動場④砂場⑤スロープ⑥遊戯室⑦固定遊具⑧その他に関してなされたが、学期・学年・性の3要因分析のF検定の結果、有意差がみられたのは、保育室、運動場および固定遊具の3つの場所のみであった。なお、運動場・固定遊具に関する有意差は、両年齢群において全く運動場・固定遊具で遊ばなかった学期があったので結果の記述から外された。

保育室に関する分散分析の結果、学期と年齢による交互作用が認められた (F=9.16,

df = 2 と150, $p < 0.01$)。さらに、学期と年齢に関する t 検定の結果 3 歳児 1 学期が同 2 学期より ($t = 2.65$, $df = 81$, $p < 0.05$), 3 歳児 3 学期が同 2 学期より ($t = 3.44$, $df = 35$, $p < 0.01$), 4 歳児 1 学期が 3 歳児 2 学期より ($t = 2.29$, $df = 47$, $p < 0.05$), 3 歳児 3 学期が 4 歳児 3 学期より ($t = 2.22$, $df = 17$, $p < 0.05$), 4 歳児 1 学期が同 3 学期より ($t = 2.18$, $df = 47$, $p < 0.05$) 有意に多く保育室で遊ぶことが観察された。

2) - 2. 素材・道具・遊具

素材・道具・遊具とひとり遊びの関係について検討するために、①砂、土②水③粘土④積み木⑤紙⑥ペン⑦鋏・糊・テープ⑧ひも⑨絵本⑩楽器⑪ままごとセット⑫人形⑬乗り物⑭固定遊具⑮大型遊具⑯フープ・おととと⑰短縄・ボール⑱植物・動物⑲その他、のそれぞれのカテゴリーの頻度が学期・年齢・性の 3 要因について検討された。F 検定の結果、有意差の見られたのは、粘土・積み木・紙・ペン・鋏、糊、テープ・絵本・ままごとセット・乗り物・固定遊具・短縄、ボール・動物、植物・その他、であった。

年齢差の見られたのは、粘土・積み木・紙・ペン・鋏、糊、テープ・固定遊具・その他のカテゴリーであった。この中、3 歳児の方が 4 歳児よりも有意に多くこれらの材料を使用したのは、粘土・積み木・紙であった：粘土 ($F = 5.60$, $df = 1$ と150, $p < 0.05$), 積み木 ($F = 4.67$, $df = 1$ と150, $p < 0.05$), 紙 ($F = 17.25$, $df = 1$ と150, $p < 0.05$)。4 歳児の方が 3 歳児よりも有意に多く使用した材料は、ペン・鋏、糊、テープ・絵本・その他の材料であった。ペン ($F = 9.21$, $df = 1$ と150, $p < 0.05$) は、さらに t 検定の結果、4 歳児全児群は 3 歳児全児群よりも有意に多かった ($t = 3.20$, $df = 160$, $p < 0.01$) ; 鋏、糊、テープ ($F = 4.17$, $df = 1$ と150, $p < 0.05$) は、さらに t 検定の結果、4 歳児全児群は 3 歳児全児群よりも有意に多かった ($t = 2.69$, $df = 160$, $p < 0.1$) ; 絵本 ($F = 6.49$, $df = 1$ と150, $p < 0.05$), とその他 ($F = 4.55$, $df = 1$ と150, $p < 0.05$) についてさらに t 検定の結果、4 歳児全児群は 3 歳児全児群よりも有意に多かった ($t = 2.87$, $df = 160$, $p < 0.01$)。

学期と性の交互作用の見られたのは、ままごとセット・乗り物・短縄、ボール・動物、植物であった：ままごとセット ($F = 4.61$, $df = 2$ と150, $p < 0.05$) はさらに t 検定の結果、女児 3 学期が男児 3 学期より ($t = 2.53$, $df = 17$, $p < 0.05$), 女児 3 学期が男児 2 学期より ($t = 2.09$, $df = 36$, $p < 0.05$) 有意に多かった。乗り物 ($F = 3.60$, $df = 2$ と150, $p < 0.05$) は、さらに t 検定の結果、男児 3 学期が男児 2 学期より ($t = 3.01$, $df = 27$, $p < 0.01$), 男児 2 学期が男児 1 学期より ($t = 2.47$, $df = 87$, $p < 0.05$) 有意に多かった。短縄、ボールは ($F = 4.51$, $df = 2$ と150, $p < 0.05$) で、t 検定の結果有意差は見られなかった。動物、植物 ($F = 3.73$, $df = 2$ と150, $p < 0.05$) は、さらに t 検定の結果、すべての子どもは 2 学期の方が 3 学期より ($t = 2.45$, $df = 66$, $p < 0.05$), 1 学期が 3 学期より ($t = 2.45$, $df = 111$, $p < 0.05$) 有意に多かった。

年齢と性の交互作用の見られたものは、その他のカテゴリーであった ; ($F = 4.55$, $df = 1$ と150, $p < 0.05$) さらに t 検定の結果、4 歳女児が 3 歳男児より ($t = 2.97$, $df = 82$, $p < 0.01$), 4 歳女児が 3 歳女児より ($t = 2.56$, $df = 60$, $p < 0.05$) 有意に多かった。

2) - 3. 行動

ひとり遊び中の行動について検討するために、遊び中の行動が、遊びの種類と遊びの中の行動に関して①構成遊び②描画③読書・認知④楽器遊び⑤ごっこ遊び⑥固定遊具で遊ぶ⑦運動遊び⑧手遊び⑨移動⑩傍観⑪ぶらぶら行動⑫何もしない⑬凝視⑭注視⑮追視⑯その他のカテゴリーについて分析された。

遊びの種類に関する①から⑧までのカテゴリーの中、学期・年齢・性の3要因分析の結果、有意差の見られたものは、構成遊び、読書・認知、ごっこ遊び、固定遊具で遊ぶ、手遊びであった。

これらのカテゴリーの中、構成遊びは年齢と性に関して有意差があった ($F=3.65$, $df=1$ と150, $p<0.05$), さらにt検定の結果4歳児が3歳児より ($t=2.36$, $df=160$, $p<0.05$) 有意に頻繁に構成遊びをした。また、年齢と性による交互作用も見られ、3歳男児が3歳女児より ($t=3.75$, $df=90$, $p<0.001$), 4歳男児が3歳女児より ($t=3.83$, $df=76$, $p<0.001$), 4歳女児が3歳女児より ($t=3.67$, $df=60$, $p<0.001$) 有意に多かった。読書・認知は、性に関して ($F=4.18$, $df=1$ と150, $p<0.05$), 学期と年齢の交互作用 ($F=6.73$, $df=2$ と150, $p<0.01$), 性と学期による交互作用 ($F=3.82$, $df=1$ と150, $p<0.05$), さらに学期・年齢・性による交互作用 ($F=3.29$, $df=1$ と150, $p<0.05$) が見られた, t検定の結果, 3歳男児1学期が3歳女児1学期より ($t=10.15$, $df=53$, $p<0.001$), 3歳男児1学期が3歳女児2学期より ($t=10.15$, $df=46$, $p<0.001$), 3歳男児1学期が4歳男児1学期より ($t=6.98$, $df=59$, $p<0.001$), 3歳男児1学期が4歳男児3学期より ($t=10.15$, $df=39$, $p<0.001$), 3歳男児1学期が4歳女児2学期より ($t=2.95$, $df=42$, $p<0.01$), 3歳男児1学期が4歳女児3学期より ($t=4.02$, $df=39$, $p<0.01$) 有意に頻繁に構成遊びをした。

読書・認知に関しては, F検定の結果, 性 ($F=4.18$, $df=1$ と150, $p<0.05$), 学期と年齢の交互作用 ($F=6.73$, $df=2$ と150, $p<0.01$), 性と学期による交互作用 ($F=3.82$, $df=2$ と150, $p<0.05$), 学期・年齢・性による交互作用 ($F=3.29$, $df=2$ と150, $p<0.05$), に有意差がみられた。さらに, 学期・年齢・性に関してt検定の結果, 3歳男児1学期が3歳女児1学期より ($t=10.15$, $df=53$, $p<0.001$), 3歳男児1学期が3歳女児2学期より ($t=10.15$, $df=46$, $p<0.001$), 3歳男児1学期が4歳男児1学期より ($t=6.98$, $df=59$, $p<0.001$), 3歳男児1学期が4歳男児3学期より ($t=10.15$, $df=39$, $p<0.001$), 3歳男児1学期が4歳女児1学期より ($t=10.15$, $df=48$, $p<0.001$), 3歳男児1学期が4歳女児2学期より ($t=2.95$, $df=42$, $p<0.01$), 3歳男児1学期が4歳女児3学期より ($t=4.02$, $df=39$, $p<0.01$) 有意に頻繁に読書・認知遊びをした。

ごっこ遊びに関しては, F検定の結果, 学期 ($F=4.06$, $df=2$ と150, $p<0.05$), 性と学期の交互作用 ($F=3.34$, $df=2$ と150, $p<0.05$) に有意差がみられた。さらに, 性と学期に関する交互作用に関してt検定の結果, 女児3学期が女児1学期より ($t=2.05$, $df=40$, $p<0.05$) 有意に頻繁にごっこ遊びをした。しかし, 学期では有意差が見られなかった。

固定遊具での遊びに関しては, F検定の結果, 学期 ($F=4.12$, $df=2$ と150, $p<0.05$), 学期と年齢の交互作用 ($F=5.73$, $df=2$ と150, $p<0.05$) に有意差がみられた。さらにt検定を行った結果, 有意差はみられなかった。

手遊びに関しては、F検定の結果、学期と年齢の交互作用 ($F=12.25$, $df=2$ と 150 , $p<0.01$), 年齢と性の交互作用 ($F=71.49$, $df=2$ と 150 , $p<0.01$), 性と学期の交互作用 ($F=13.66$, $df=2$ と 150 , $p<0.01$) に有意差がみられた。さらに、学期と年齢に関する t 検定の結果、3歳児1学期が4歳児1学期より ($t=2.55$, $df=63$, $p<0.05$), 4歳児1学期が4歳児3学期より ($t=2.12$, $df=47$, $p<0.05$) 有意に頻繁に手遊びをした。性と学期に関する t 検定の結果、男児1学期が男児3学期より ($t=3.21$, $df=69$, $p<0.01$), 男児1学期が男児2学期より ($t=2.80$, $df=88$, $p<0.01$), 女児2学期が男児2学期より ($t=2.04$, $df=47$, $p<0.05$), 女児2学期が男児3学期より ($t=2.29$, $df=28$, $p<0.05$) 有意に頻繁に手遊びをした。

ひとり遊び中にみられる行動に関しては、移動・傍観・ぶらぶら行動・何もしない・凝視・注視・追視・その他のカテゴリーについて分析された。これらのカテゴリーの中、F検定の結果有意差の見られたのは、移動・傍観・ぶらぶら行動・注視であった。

移動は、F検定の結果、学期と年齢の交互作用に有意差が認められた ($F=6.97$, $df=2$ と 150 , $p<0.01$), さらに t 検定の結果、3歳児2学期が4歳児1学期より ($t=2.74$, $df=65$, $p<0.01$) 有意に頻繁にひとり遊び中に移動をした。

傍観は、F検定の結果、学期に有意差が認められた ($F=5.81$, $df=2$ と 150 , $p<0.01$), さらに t 検定の結果、3学期全児が2学期全児より ($t=2.49$, $df=66$, $p<0.05$), 3学期全児が1学期全児より ($t=2.44$, $df=111$, $p<0.05$) 有意に頻繁にひとり遊び中に傍観をした。

ぶらぶら行動は、F検定の結果、年齢 ($F=5.29$, $df=1$ と 150 , $p<0.05$), 学期と年齢の交互作用に ($F=4.04$, $df=2$ と 150 , $p<0.05$), 年齢と性の交互作用に ($F=6.75$, $df=1$ と 150 , $p<0.01$), 性と学期の交互作用に ($F=4.62$, $df=2$ と 150 , $p<0.05$) 有意差がみられた。さらに年齢と学期による t 検定の結果、4歳児3学期が3歳児2学期より ($t=2.09$, $df=36$, $p<0.05$), 4歳児3学期が3歳児3学期より ($t=2.37$, $df=17$, $p<0.05$) 有意に多かった。性と学期による交互作用では、女児1学期が女児3学期より ($t=2.13$, $df=40$, $p<0.05$), 男児3学期が男児2学期より ($t=2.42$, $df=42$, $p<0.05$) 有意に頻繁にぶらぶら行動をしていた。ただし、年齢・年齢と性による交互作用においては t 検定の結果有意差はみられなかった。

注視は、F検定の結果、学期 ($F=4.04$, $df=2$ と 150 , $p<0.05$), 年齢 ($F=9.27$, $df=1$ と 150 , $p<0.01$), 学期と年齢の交互作用 ($F=4.68$, $df=2$ と 150 , $p<0.05$) に有意差がみられた。さらに年齢と学期による t 検定の結果、4歳児3学期が3歳児1学期より ($t=2.72$, $df=63$, $p<0.01$), 4歳児3学期が3歳児2学期より ($t=2.83$, $df=36$, $p<0.01$), 4歳児3学期が3歳児3学期より ($t=2.73$, $df=17$, $p<0.05$), 4歳児3学期が4歳児2学期より ($t=2.41$, $df=29$, $p<0.05$), 4歳児3学期が4歳児1学期より ($t=2.30$, $df=47$, $p<0.05$) 有意に多く注視をした。

2) - 4. 言語

言語に関する分析は、幼児が話しかけられる場合 (受動), 幼児自身が言語を発する場合 (能動) に分け、その対象を①道具②教師③他児④観察者の四つに分け計8カテゴリーについて行われた。データは8ミリビデオ撮影により収集されたので、撮影時のカメラの

位置やケースによっては言語化のデータの記録できにくい場合があった。ここでは収集されたデータについてのみ検討する。これらのカテゴリーの中、学期・年齢・性に関してF検定の結果有意差の見られたものは、道具に対する言語化・観察者に対する言語化・観察者からの言語化であった。

道具に対する言語化カテゴリーは、F検定の結果年齢と性による有意な交互作用がみられた ($F=7.73$, $df=1$ と 150 , $p<0.01$)。さらに年齢と性によるt検定の結果、3歳児全児が4歳児全児より ($t=2.63$, $df=160$, $p<0.01$) 有意に多く道具に対する言語化を行った。

観察者に対する言語化カテゴリーは、F検定の結果、年齢に関して有意差がみられた ($F=4.26$, $df=1$ と 150 , $p<0.05$)。さらに、t検定の結果、4歳児全児が3歳児全児より ($t=2.17$, $df=170$, $p<0.05$) 有意に多く言語化をした。

観察者からの言語化は、F検定の結果、学期に関して有意差がみられた ($F=4.06$, $df=2$ と 150 , $p<0.05$)。さらに、t検定の結果、2学期全児が3学期全児より ($t=2.53$, $df=66$, $p<0.05$) 有意に多く言語化をした。

3) 同一素材を使用してのひとり遊び行動の変化

同一の素材を使用しても、発達が異なれば遊び方に違いが生じることは当然考えられる。筆者はこれを質的相違と考え、砂、土・粘土・紙の各素材と構成遊び・ごっこ遊び・手遊び遊び・読書、認知の種類との相関について検討した。表6は、これらの素材と遊びとの有意な相関を示す。表6において、括弧内の数は事例数を示す。

表6. 素材と遊びの種類との相関

年 学 期 齡		I	II	III	通 年
粘 土 と 遊 手 び	3 歳	0.978** (12)	0.950* (4)	1.000 (2)	0.980** (18)
	4 歳	0.990 (3)	なし (0)	なし (0)	0.990(*) (3)
紙 と 構 遊 成 び	3 歳	0.802** (17)	0.320 (8)	0.980* (4)	0.800** (29)
	4 歳	0.56 (23)	0.900** (16)	-0.470 (6)	0.840** (45)
紙 と 描 遊 画 び	3 歳	0.435(*) (17)	0.579 (8)	-0.480 (4)	0.450* (29)
	4 歳	0.250 (23)	0.350 (16)	0.920** (6)	0.330* (45)
紙 と 読 書 知	3 歳	0.000 (17)	0.000 (8)	0.000 (4)	0.000 (29)
	4 歳	なし (23)	0.370 (16)	なし (6)	0.360* (45)

注 ** $p<.01$, * $p<.05$, (*) $p<.10$ 。

表6から、3歳児1学期・2学期・通年において粘土と手遊びに高い相関がみられた紙と構成遊びにおいて、3歳1学期・3学期および4歳1学期・2学期と、3歳と4歳の通年において有意な相関がみられた。紙と読書・認知に関しては、4歳児の通年に有意な相関が見られた。

4) 注視と遊び行動の関係

2) - 3)においてひとり遊び中の行動の中、注視に学期と年齢に関して有意差が認められたので、ひとり遊び中の行動の変化について検討するために、注視と他の遊び行動との関連を検討した。表7は、遊び中の行動の中傍観・ぶらぶら行動と注視との相関を示す。

表7. 遊び中に観察された行動と注視との相関

年 学期 年齢		I	II	III	通 年
傍 観 と 注 視	3歳児	0.739** (40)	0.853** (23)	0.456 (8)	0.696** (71)
	4歳児	0.520** (31)	0.899** (15)	0.943** (9)	0.649** (55)
ぶ ら ぶ ら 行 動 と 注 視	3歳児	0.354 (14)	0.661 (6)	0.000 (1)	0.301 (21)
	4歳児	0.923** (9)	0.902* (6)	0.982* (4)	0.885** (19)

傍観と注視との相関は、3歳3学期を除いて両年齢群において有意な相関がみられた。また、ぶらぶら行動と注視の相関については、4歳児ではすべての学期および通年に有意な相関がみられた。3歳児と4歳児とのぶらぶら行動とは異なることが明らかにされた。

考 察

幼児のひとり遊びに関して3歳児と4歳児の遊び行動を1年間にわたって観察し、その発生数・継続時間・遊び行動のカテゴリー分析の観点から検討した。

Rooper and Hinde (1978) は、ひとり遊びに関して縦断的研究法の重要性を指摘している。本研究では、3歳と4歳の異なる年齢集団を対象に1年間継続的にひとり遊びの変化を観察し、3歳と4歳のひとり遊びの差異を明らかにすることを意図してきた。

表1および表2から、年齢の上昇にともないひとり遊びの発生数は減少していることがわかる。しかし、そのひとり遊びの継続時間は年齢の上昇にともない長くなっていることが明らかにされた。ひとり遊びは、Parten らのような幼児にみられる未熟な遊び形態ではなく、年齢が高くなっても幼児が行う遊び形態であることが明らかにされた。さらに3歳児においては、ひとり遊びを1人の女兒を除いてみんなひとり遊びをしたのに比較して、4歳児においては1年間を通じて全くひとり遊びをしなかった子どもと、ひとり遊びをした子どもが存在することが明らかにされた。この事実は、Moore et al. (1974)

や Rubin et al. (1976) によって示唆されたひとりで遊ぶか集団で遊ぶかは、発達的な差異ではなく子ども自身による選択の問題であるということと一致する。

カテゴリー分析において、ままごととセットでは性と年齢に有意差が明らかにされた。両年齢群において1学期では男児の方が僅かにままごと遊びを多くするが学期が進むに連れて女児の方が増加している。また乗り物は、両年齢群とも男児の方が多くこの遊びをしている。ひとり遊びにも性差の見られることが明らかにされた。

素材と遊び行動の関係を種々の素材と遊びの種類について相関を取って検討すると、粘土と手遊びに関して顕著な差が明らかにされた。即ち、3歳児においては粘土を使用した手遊びが各学期を通して有意な相関となって観察されたが、4歳児ではこの関係については全く有意な相関は得られなかった。同一の素材を使用しても、年齢により遊び行動の質的な変化があることが明かにされた。

さらに、紙と読書・認知との相関については、4歳児にのみ有意な相関が得られた。この読書・認知のカテゴリーは、絵本を見る／読む、文字を書く／読む、迷路を作る／たどるの行動を指す。4歳児のひとり遊びには、認知能力との関連のあることが示唆された。

視線と遊び行動の関係について、飯島は(1989)、子どもが新しい場面に入るとその場面に適応する準備行動として「ぶらぶら歩き」・「傍観」をすること、つまりこのような行動が探索の機能を果していることを明らかにしている。本研究においても、4歳児は注視をしながら「ぶらぶら歩き」をするが、3歳児はただ「ぶらぶら歩き」をすることが明らかにされた。4歳児のひとり遊び中に見られる「ぶらぶら歩き」は探索機能をもつが、3歳児の「ぶらぶら歩き」は4歳児のそれとは異なることが明らかである。

参考文献

- Bakeman, R., & Brownlee, J. R. 1980. The Strategic use of parallel play : A sequential analysis. *Child Development*, 51, 873-878.
- Barnes, K. E. 1971. Preschool play norms : A replication. *Developmental Psychology*, 5, 99-103.
- 飯島婦佐子 1990. 生活を作る子どもたち—倉橋惣三理論再考— フレーベル館
- Moore, N. V., Everstone, C. M., & Brophy, J. E. 1974. Solitary play ; Some functional reconsiderations. *Developmental Psychology*, 10, 830-834.
- Parten, M. B. 1932. Social participation among preschool children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27, 243-269.
- Parten, M. B., & Newhall, S. M. 1943. Social behavior of preschool children. In Barker, R. G., Koumin J. S. & Write, H. F. (Eds.) *Child Behavior and development*. McGrawhill, New York.
- Rooper, R. & Hinde, R. A. 1978. Social behavior in a play group : Consistency and complexity. *Child Development*, 49, 570-579.
- Rubin, K. H. Maioni, T. L. & Hornung, M. 1976. Free play behaviors in middle-and lowerclass preschoolers : Parten and Piaget revisited. *Child Development*, 74, 414-419.
- Smith, P. K. and Connolly, K. J., 1972. Patterns of play and social interaction in

preschool children. In Blurton-Jones, N. (Ed.) *Ethological Studies of Child Behaviour*. Cambridge University Press, Cambridge.

Smith, P. K. 1978. A longitudinal Studies of social participation in preschool children : Solitary and parallel play reexamined. *Developmental Psychology*, 14, 517-523.